Norman G. Gaylord

高 橋 明 雄*

私が Gaylord を知ったのは大学院学生のころ出版された“Linear and Stereoregular Addition Polymers”に Mark 教授と並んで共著者として彼の名を見出したとき以来であります。その後彼の活躍を通して間接的に知るようになり、直接会うまではそのネームバリューからして彼は化学会または業会に相当の貢献を遂げたすでに初老の紳士かと思っていました。しかしながら最初 Gaylord に会った時、これまで一人勝手に心に描いていた人物とはまるっきり異なり、むしろこれからの活躍ははるかに多く期待されまた約束された 40 を出たばかりの活力あふれる気鋭の現役であるのには少なからず戸惑った次第です。

本欄に Gaylord を紹介してほしいと編集委員会から依頼されたときは非常に光栄に思いさっそく引き受けましたが、実際彼の人物評伝を書くにあたっては容易でないので気付きました。というのは彼の職業が日本の社会にとっては非常に例の少ない特殊な理解しにくいものであると同時に、彼がその職業にきわめて適している人物と思われるからです。すなわち、彼は学究肌の化学者でもなく典型的なビジネスマンでもないと同時にまたその両者でもあるという点であります。その高分子科学の領域における経験、知識、努力、能力、関心およびその他のすべてをきわめてすみやかに経済的なものと関連させて具象化することが職業であるといえましょう。

Gaylord 家はその両親の代にイギリスから移住して来っており、彼はニューヨークのブルックリンで 1923 年に生まれました。大学を出るまではきわめて平凡な履歴であるのに反して、その後は多彩な経歴を経ているのでそれをいくつかの年代別にわけて紹介してみましよう。

第二次大戦のころ (1943~1946 年)

1943 年 College of the City of New York の化学科を卒業、Pennsylvania Salt Mfg. Co. に入社し終戦の年まで戦時研究員として勤務し、その後 1 年間空軍の技術研究所に勤める。

ブルックリンポリテック時代 (1946~1950 年)

1946 年から Merck & Co. に Research chemist として勤めるかたわらブルックリンポリテックの夜間に通い、Becker 教授の許でグリニャール反応の応用について研究し M. S. をとる。

1948 年 Merck 社をやめて、昼間に移り Eirich 教授の所で Ph. D. の研究に専従する。研究題目は、“アリアル化合物ならびにその重合”。1 年半で Ph. D. の仕事を終り、Eirich に論文の作成を相

談したところ、規定の 3 年を待たなければだめだと言われたので、六つの報文をまとめて出したら初めて論文の提出を許可された (4 人の子供をかかえていたので、なるべく早く就職しなければならなかった) 結局 2 年で Ph. D. をとる。

Mark 教授との出会いもこの時期である。Ph. D. の研究に専従するため Merck 社をやめたので経済的に苦しく、Fellowship では十分でなかった。このことを Mark 教授に話したら、ちょうどそのとき政府スポンサーのプロジェクトに有験者のリーダーを捜していた所なので非常に喜んで Research Associate として使ってくれた。結局 Eirich の所での Ph. D. の研究の他にパートタイムとして前記のプロジェクトを指導し、他に 5 人の Ph. D. コースの学生をも指導したといわれる。

du Pont 時代 (1950~1955 年)

ブルックリンポリテックで学位をとった後、Mark 教授が du Pont のコンサルタントをしていた関係で当社に Research Associate として入社する。ここでは主としてポリマーコーティングについて研究しマイラー、セロハン、塩ビが対象であった。この時期に還元性無機および有機化合物に興味をもち独自で膨大な文献を調べ上げ“Reduction with Complex Metal Hydrides” (Interscience Publishers) を書いた (出版は後になる)。これはロシア語にも翻訳された。さらに、du Pont 出社かたわら Canisius College に Adjunctive Prof. として勤め大学院学生の研究を指導した。

Interchemical 時代その他 (1955~1961 年)

* Akio TAKAHASHI, Gaylord Associates Inc., Newark, N. J. ・工博

du Pont を去り、Mark 教授の紹介で Ienterchemical Corp. Org. Chem. Dept. の Director として入社した。ここでは会社のプロジェクトとは関係なく自分のアイディアだけを試みることでできる助手をもらった。Thermosetting Acrylic Resin その他に独自のアイディアを活かし数十の特許をとった。この時期に Mark 教授から “Linear and Stereoregular Polymers” の共著の相談を持ちこまれ、本人も以前から Complex Metal Hydrides および金属アリル化合物に興味をもっていたので快く承諾した。この本はロシア語、ドイツ語、チェコスロバキヤ語、日本語、その他世界各国語に翻訳されたそうだ。またそのころ Mark 教授から “外国から自分の所で研究したいという希望者が非常に多いが、自分 1 人ではとても手が回らないから協力してくれないか” と言われ、Adjunctive Prof. としてその後主として外国人研究者の指導に当たっている。High Polymer Series (John Wiley & Sons) の “Polyethers” “Polyesters” “Polyamides” の仕事の大部分もこの時期に行なった。その後 1959 年から約 2 年間 The Western Petrochem. Corp. Polymer Division の Vice-President を経て、Mark 教授をはじめ周囲からの奨めと本人の意欲から現在のコンサルタント生活に入った。

1961 年以後より現在まで、

Gaylord Associates Inc. の研究、出版、科学文献集録の指導、アメリカ内の 30、ヨーロッパ、日本を含む 15 主要化学会社のコンサルタントをしており、月の半分はそれに当てがわれ、年に 1 回以上または不定期的にヨーロッパに出かける。その他の職業的活動は、

Encyclopedia of Polymers & Plastics (Executive Editor) J. Applied Polymer Science (Editorial Board Member) J. Polymer Sci. (Advisory Board Member) Macromol. Synth. (Secretary to Editorial Board) Soc. of Plastics Eng. (Advisory Board Member) Resin, Rubber & Plastics Lit. Serv. (Editor-in-chief) Natural & Synth. Fibers Lit. Serv. (Editor-in-chief) で最後の二つに関しては、京大岡村先生、東北大学の村上先生に寄稿をお願いしている由。

また、チェコスロバキアの Dr. Kössler との共同研究 “Cyclo-and Cyclized Diene [Polymers]” も行っており、今年日本で開かれた IUPAC に発表された。

以上の研究歴を見てもわかりますように、その範囲は有機および高分子化学のほとんどすべてを網羅しており、その都度鋭い洞察に基く科学的なひらめきをもって研究上の難門を打破しその熱意と努力で推進せしめています。その結果彼の発明による特許は 100 に近い数に及び、ほぼ同数の報文も発表されています。その努力と熱意は実際に並みではなく、彼によれば化学者（教職学者を除く）は常に三つのこと “Working, Writing, Tea-

ching” が可能で、彼はそれをずっと実行して来ています。たとえば du Pont 時代に、会社は何の興味も示さなかったが、独自で膨大な文献を調べ “Reduction with Complex

Metal Hydrides” の大書を書き上げました。またその時期に、自分の研究による人造皮革の性能をテストするためピンクの靴をはいて Canisius College に毎日講義に行かれたそうです。彼の携帯品は通常のものの他に、ダンボール箱五つの文献と書類カバン二つで、時間場所のいかんを問わず必要ときに彼はこれらを紐解きチェックしながら諸問題を解決して行くのであります。そんな彼に “忙がしくて大変ですね” と言いますといつも “俺はおもしろいんだよ” と答えます。実に尽きない興味をもって精力的に仕事を処理するのには感心しています。

そんなに忙がしい彼でも余暇を見つけては趣味の “Wood Work” に精出しています。最初のころは木彫りが主だったようですが、今ではもっぱらそのコレクションに移り、New Providence の自宅には世界各地から集めて来た木製彫刻が居間、書斎を問わずいたる所にゴロゴロしています。最近自身でつくるのはキャビネットが主で、自宅の書斎の本棚ならびに本箱は全部彼の作品であり、その腕前は趣味の域を脱しているとの定評です。そのうち木彫コレクション用の陳列棚をつくってご披露するとのことでした。彼も家庭ではアメリカでよく見られるような平凡な夫または父親にかえり、時折りのパーティではパーテンドーやパーベキューのcock長をつとめ、お客さんにすすめながら愉快地談笑します。日常社交はすべて奥さんのお膳立てによるようであります。当地ではこのような内助が非常に大事で、彼も時々奥さんのことを Social Secretary と呼んではその功を認めています。Gaylord 夫妻間には一男三女の子があり、長女と次女がこのたび相次いで婚約され、長女ローリー嬢が一足先に 7 月結婚の予定です。一人息子リチャードは来年ブルックリンポリテクの大学院に、末娘コーリーは両親といっしょの日本旅行に胸をはずませています。

このたび IUPAC に参加するため渡日し、学会の他に T 社を始め数カ所で講演をされるそうに彼に接する機会を持たれる方も多いと思いますが先に述べましたように、彼はむしろこれからの活躍がはるかに多く期待される気鋭の現役でありますので、将来彼に対する新たな “人物評伝” が必要になるのではないかと思います。

ご健闘を祈ってやみません。

New Providence 自宅でのパーベキュー風景。Gaylord 夫人にだかれた筆者の長女を奈ちゃん。その左が Gaylord 氏。